

同一社会文化を背景とするバイリンガルの文章構造の特徴*

— キルギス語とロシア語における意見文の比較 —

四国大学

西條 結人

1. はじめに

説得とは、送り手が、主に言語的コミュニケーションを用いて、非強制的なコンテキストの中で受け手を納得させながら受け手の態度や行動を自らが意図する方向に変化させようとする（深田，2002）行為である。受け手のネガティブ・フェイス（Brown and Levinson, 1987）を侵害する恐れがあり、異文化間コミュニケーションにおいては慎重に行われる必要がある行為と言えよう。

説得は話し言葉、書き言葉の両方によって行われるが、書き言葉は、書き手と読み手が異なる空間・時間におり、書き手の文章によっては書き手の見えないところでフェイス侵害行為が起こる可能性も考えられる。文章における説得が必要な場面では、書き手がどのような説得のストラテジーを用いて文章を書くのかについて、書き手と読み手が互いに理解することは異言語・異文化間コミュニケーションにおける相互理解に貢献しうる要素である。

文章における説得に関する研究は、主に対照修辞学の分野でモノリンガルの母語と外国語に関する比較研究が行われており、それぞれの言語には固有の論理構造が存在していることが報告されているが（Kaplan, 1966等）、2言語以上の言語能力を有するバイリンガルの説得の構造については明らかにされていない。書く行為は書き手の思考を表現する上で重要であり、モノリンガルとバイリンガルの説得を目的とした文章を比較することは、モノリンガルとバイリンガルが有する固有の説得の構造を明らかにすることにつながり、言語習得の観点から意義があるものと考えられる。これまでの研究で、評価者の文章構造に関する観点が学習者への評価に影響し、評価者が評価者の母語での枠組みから外れた文章を低く評価することも指摘されており（Hinds, 1983；長谷川・堤，2012）、バイリンガルが書いた文章において

* 本研究は令和2（2020）年度四国大学学術研究助成「多言語・多民族社会におけるバイリンガルの説得の言語行動に関する研究」（研究代表者：西條結人）を受けたものである。本研究での作文調査の実施にあたり、ビシケク国立大学のジュヌシャリエワ・アセーリ上級講師、キルギス国立総合大学のジョルブラコワ・マイラム上級講師、キルギス国立大学付属日本学院のイシライロワ・ジルディズ講師には多大なご協力をいただいた。深く感謝申し上げます。

も同様に評価者の母語での枠組みから外れた場合には低く評価される可能性も考えられる。

本研究では同一社会文化の例としてキルギス共和国（以下、キルギス¹⁾）を取り上げる。キルギスは中央アジアに位置する旧ソ連の国で、言語は国家語をキルギス語、公用語をロシア語とし、90以上の民族が暮らす多言語多民族国家である（Orusbaev et al., 2008）。キルギス語とロシア語のモノリンガルとバイリンガルが共存しており、1つの社会文化におけるモノリンガルとバイリンガルの比較検証が可能であることを理由として本研究ではキルギスを取り上げた。堀口（2018）は、旧ソ連諸国では、同一社会内において、基幹民族言語とロシア語に対する価値観が異なることを指摘している。キルギスの言語状況は、異なった言語を母語とする2つ以上の集団が社会的に接触する状況である「言語接触」（柳沢・石井，1998）であり、様々な言語や文化を背景とする人々が1つの社会の中で生活している。そのため、同一社会内で民族と言語、文化が複雑に影響し合っており、他の旧ソ連諸国同様に、民族間の言語意識や言語使用といった点においてコミュニケーション上の問題が生じることも考えられる。

そこで、本研究では主としてキルギス語とロシア語の二言語が同一社会で用いられるキルギスにおいて、キルギス語・ロシア語バイリンガルの説得を目的とした文章の構造を明らかにすることを目的とする。

2. 先行研究

2.1. 文章構造に関する研究

日本語教育の分野では、文章構造を分析の枠組みとした異文化間の比較研究が行われている。そのような研究としては、あるテーマ設定の下に日本語母語話者と日本語学習者の書いた作文を分析したもの（佐々木，2001；伊集院・高橋，2012；伊集院・盧，2015等）や、研究者によって準備された文を回答者が配列することで文章を完成させる文配列課題を分析したものが挙げられる（杉田，1994；金，2006）。これらの研究の結果、いずれの研究事例も日本語母語話者については文章構造の傾向を導き出している。日本語学習者については、伊集院・高橋（2012）は、論の展開中に言及していなかった新情報が作文の末尾に提示される傾向があることが示唆しており、伊集院・盧（2015）は、日本語、韓国語において読み手が早い段階で書き手の主張が読み取れる構造であると述べている。いずれの研究も、説得を目的とする文章において、回答者の母語によって好まれる文章構造が異なる可能性を示唆している。

¹⁾ 「キルギス」の日本語表記については、中央アジア研究者の間では原語の発音に近い「クルグズ」「クルグズスタン」と表記されることもあるが、本稿では外務省等で用いられている表記に倣い、「キルギス」と表記する。

また、異文化間の比較を行う際、作文課題の指示が被験者の文章のスタイルに影響を及ぼす可能性が示唆されている（佐々木，2001）。調査協力者に外国語で意見文を書かせると、書き手の意図する主張が、読み手に伝達されにくい可能性がある（伊集院・高橋，2012）。「文配列」研究は、「文配列」により被験者が自由に作文することを制限することで、データ収集後の分析を行う際に研究者の主観性を排除しようとしたものであると思われるが、文章が必ずしも被験者の意見や立場と一致するわけではない（杉田，1994；金，2006）。

2.2. キルギスにおける言語事情と教育に関する研究

キルギスの言語事情と教育に関する研究としては、キルギス共和国統計委員会が5年に一度発行している統計集『キルギス共和国における教育と科学』（Natsional'nyi statisticheskii komitet Kyrgyzskoi Respubliki, 2018²⁾（以下、Natsstatkom KR（2018））、言語意識と教育の関わりに関する研究（Korth, 2005）や、大学生活における言語選択と使用状況（西條，2019a）等が挙げられる。

Korth（2005）は、キルギス語教授学校とロシア語教授学校の教授言語と居住地によって「キルギス語モノリンガル」「ロシア語モノリンガル」「キルギス語・ロシア語バイリンガル」の3つに大別できることを示唆している。Natsstatkom KR（2018）によれば、2017-18年度のキルギスの初等中等教育機関では、学校数の約90%はキルギス語教授学校、ロシア語教授学校、もしくはキルギス語・ロシア語二言語教授学校であり、児童生徒の87%がキルギス語、ロシア語またはキルギス語・ロシア語二言語教授学校に在籍し、高等教育機関では、2017-2018年度のデータではロシア語を教授言語とする学生が66.7%、キルギス語を教授言語とする学生が24.7%であるという。いずれの教育機関でも児童生徒、学生の多くがキルギス語もしくはロシア語、その両方で教育を受けている。キルギス語教授学校出身学生は思考する言語としてキルギス語を使用し、ロシア語教授学校出身の学生は書く場面でロシア語の使用が顕著に見られ、使用言語がロシア語のみで成立していることが示唆されている（西條，2019a）。

キルギス語、ロシア語に限らず、山本（2014）によれば、バイリンガルの言語能力は、各言語のモノリンガルの言語能力が同じとは限らず、2つの言語が相互に影響を及ぼし合い、モノリンガルの言語とは異なる特徴を有している可能性があり、言語ごとに優位な領域があるという。したがって、「キルギス語・ロシア語バイリンガル」についてはバイリンガルを2群に分け、書く場面においてキルギス語とロシア語の2言語のうち、書き手がどちらの言

²⁾ 本稿でのキリル文字表記は、小松他（2005）「翻字・アルファベット表」に倣い、表記した。意見文については、原文のままキリル文字で表記し、訳文を併記した。また、Natsional'nyi statisticheskii komitet Kyrgyzskoi Respublikiの略称については、当該機関のロシア語刊行物等で用いられている Natsstatkom KRを用いた。

語を優位としているかを事前に確認し、調査を行う必要がある。

3. 調査の概要：データ収集と分析の枠組み

3.1. 研究課題の設定

先行研究の分析により、文章構造研究は、モノリンガルや学習言語から文章構造類型の比較研究が行われており（杉田，1994；佐々木，2001；金，2006；伊集院・高橋，2012；伊集院・盧，2015），作文課題の指示や書き手の母語が影響し、文章構造に差異が生じる可能性があることが明らかになった。一方で、バイリンガルや、同一社会文化における異なる言語話者を対象とした研究は行われておらず、その言語的優位性も明らかになっていない。モノリンガルとバイリンガルでは、言語能力が同じとは限らないことが指摘されており（山本，2014），文章においても二者間で異なる文章構造が用いられる可能性がある。また、二言語が相互に影響を及ぼすとすれば、モノリンガルと比較し、どちらの言語が言語的優位に出現するのかを明らかにすることで、西條（2019b）で指摘されている文章構造と教育の関わりや、二言語間の転移の検証が可能となる。バイリンガルをめぐっては、書きことばの体系に二言語間で共通性があれば、第一言語での技能が書く能力に転移することもあるため（ベーカー，1996），言語的優位性からも第一言語での文章構造の体系を明らかにすることは重要となる。

キルギスにおける言語話者は「キルギス語モノリンガル」「ロシア語モノリンガル」「キルギス語・ロシア語バイリンガル」の3群に大別でき、民族や出身教授学校によって使用言語が異なることや、二言語の習熟度に地域差が生じていることが明らかになっている（Natsstatkom KR, 2018；Korth, 2005；西條，2019a）。

以上の先行研究の課題を踏まえ、本研究では意見文課題を用いて、同一社会文化における異なる言語話者の文章構造の特徴を明らかにする。研究目的を達成するため、次のような研究課題を策定した。

研究課題1：同一社会文化を背景とした異なる言語話者は意見文においてどのような文章構造を用いようとするか

研究課題2：同一社会文化を背景とするバイリンガルの意見文の文章構造はモノリンガル話者と比較をすることでどのような特徴が見られるのか

研究課題3：意見文の文章構造において、キルギス語・ロシア語バイリンガルのそれぞれの言語的な優位性はどのように表出するのか

3.2. 作文調査の方法

先行研究の分析において書き手の意見が出現しやすい課題を設定する必要があると判断さ

れたため、伊集院・高橋（2012）を参考に課題文を作成した。意見文課題はキルギス語、もしくはロシア語で収集し、データとしては筆者が日本語訳したものを使用する。なお、筆者による日本語訳はキルギス語、ロシア語を母語とし、日本語が堪能な者に誤訳がないかどうかの確認を依頼し、訳出した文章の正確さを確認した。分析に必要な最低限の字数を確保するため、キルギス語意見文については150語以上、ロシア語意見文については180語以上とした。それぞれの言語の最低語数の根拠としては、事前にパイロット調査で収集したデータに日本語訳を行い、「100字から200字を一段落の目安（金子，1996）」とし、最低400字程度あれば分析可能と判断した。本研究では意見文を、書き手の意見や主張を、根拠に基づいて論理的に述べ、読み手を説得する文章（近藤，1996）であるとし、伊集院・高橋（2012）を参考に課題文を作成した。意見文課題はキルギス語、もしくはロシア語で収集し、データは筆者が日本語訳したものを使用する。なお、日本語訳に際してはキルギス語、ロシア語を母語とし、日本語が堪能な協力者を通じて訳出した文章の正確さを確認した。課題は「インターネット社会において新聞や雑誌は必要か」というものである。本研究の課題において、読み手の設定は重要な要素であると判断し、読み手は書き手と同じ言語文化圏（母語場面）を想定し、「書き手と同じ世代のキルギスの大学生」とした。

本研究での調査対象とする意見文は、(1) キルギス語モノリンガル【キルギス語意見文】(KK)，(2) ロシア語モノリンガル【ロシア語意見文】(RR)，(3) キルギス語・ロシア語バイリンガル（キルギス語優位）【キルギス語意見文】(KRK)，(4) キルギス語・ロシア語バイリンガル（ロシア語優位）【ロシア語意見文】(KRR) から成る。(1) から (4) 群いづれも回答者の優位な言語で作文を書いてもらうことにした。母語の判定には Skutnabb-Kangas (1984) や田浦 (2014) を参考にし、「日常生活において回答者が書く場面において最も使用する言語」とし、フェイスシートで「キルギス語のみを使用する」を選択した者は KK，「ロシア語のみを使用」を選択した者は RR，「キルギス語・ロシア語の両方を書く場面で使用しているが、キルギス語をよく用いる」を選択した者は KRK，「キルギス語・ロシア語の両方を書く場面で使用しているが、ロシア語をよく用いる」を選択した者は KRR とした。バイリンガルについては、どちらの言語も年齢相応のレベルに未到達であるダブル・リミテッド（迫田，2020）の可能性も考えられるが、データ数を重視したため、書く能力は考慮していない。

作文調査は2019年1月から2月にかけて紙媒体で実施した。ビシケク国立大学，キルギス国立総合大学，キルギス国立大学の人文学・社会科学系学部 に所属する学生112名に回答を依頼し，表1の通り回答を得た。

3.3. 分析の枠組みと方法

本研究の分析の枠組みとして，樺島（1983）で図示されている文章構造（「トリー」）を用

表1 回答者に関する情報

	KK	RR	KRK	KRR
意見文の数	18編	29編	37編	28編
出身教授学校	キルギス語教授学校18名	キルギス語教授学校3名, ロシア語教授学校26名	キルギス語教授学校36名, ロシア語教授学校1名	キルギス語教授学校6名, ロシア語教授学校22名
意見文の言語	キルギス語	ロシア語	キルギス語	ロシア語
平均年齢	19歳	18.8歳	19.05歳	18.88歳

いる。樺島（1983）は文章を「ある意図によって書かれた、まとまった言語作品」と述べている。文章においてどのような要素がどのような順序で並んでいるかは重要であると主張し、「トリー」と呼ばれる階層構造（図1）を提示している。「トリー」について、樺島（1983）は「文章の構造を、意味を捨像し、意図のあり方、および必要に応じてそこに文脈の切れ続きの関係を加えた」ものと定義している。

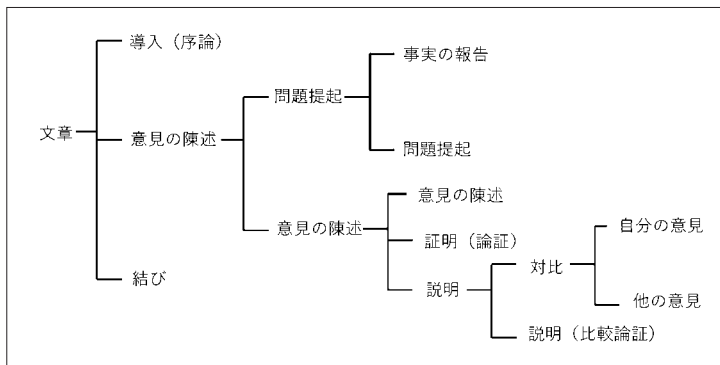


図1 樺島（1983）の文章の階層（「トリー」）構造例

（樺島，1983をもとに筆者が編集）

「文章」は「導入（序論）」「意見の陳述」「結び」で構成され、「意見の陳述」から分岐している「問題提起」「意見の陳述」の2つの下位カテゴリー以降の階層は文章の内容的な要素を指している。本研究での分析方法に樺島（1983）を用いる理由としては、まず文章を「導入（序論）」「意見の陳述」「結び」の3つの構成で捉え、さらには文レベルで1つの要素に認定することができる点による。比較階層構造という点を生かし、「文章」から「文」といったように、大きなまとまりからより詳細なまとまりに文章を分析できると判断したことによる。なお、樺島（1983）では「トリー」と呼称されているが、前川（2020）に倣い、より一般的な呼称とされる「ツリー」と本研究では呼称する。

階層構造の認定にあたっては、最初に形式段落に基づき、構成単位「導入」「本論」「結び」を設定した。次に、文単位（ロシア語、キルギス語文に準拠、訳出する過程で文が複数になっ

た場合も原文に沿って一文とする)で、ツリー階層構造の要素を認定した。なお、文章の段落数が一つの場合も「導入・本論・結び」を構成するものと想定し、ツリー階層構造の認定には問題ないものと判断し、分析を進めた。本研究で用いた階層構造の認定方法には、樺島(1983)、前川(2020)を参考に次の表2の定義に基づいてツリー構成要素のコーディングを行い、分析を行った。コーディングの筆者の信頼性を保証するために、KKの意見文18編において日本語、キルギス語、ロシア語に堪能なセカンドコーダー1名を立てて、筆者とセカンドコーダー2名による分析を行い、不一致の場合はなぜそのよう認定に至ったのか確認を行った。コーディングの認定がKKの意見文において8割程度で一致したため、残りの意見文は筆者単独で分析した。

表2 本研究で用いた文章構成要素と事例

要素	定義	事例
意見の陳述	書き手が自身の立場や主張、意見を述べること	Менин көз карашым газета-журналдарды көбөйтүү керек. 「私の考えでは新聞や雑誌などを増やさなければならない。」(KK17:14)
論拠	意見の陳述に理由や解説を示すこと	Потому что найдутся любители почитать их-это мой сугубо личное мнение. 「なぜならば、これは個人的な意見であるが、それらを読む人はいつかいるかもしれない。」(RR04:14)
事実の報告	出来事や物事を客観的に述べること	Роль интернета действительно становится все более и более ощутимой с каждым днем, причем практически в любой сфере человеческой деятельности: образовательной, медицинской, культурно-духовной и других. 「インターネットの役割はますます一日一日と重要になっていて、人間が活動するどの分野においても重要度を増しており、その分野とは教育や医学、文化活動等がある。」(KRR06:1)
説明	事実の報告に理由や解説を示すこと	Раньше мы ждали когда например выйдет новый выпуск вечернего Бишкека, де-факто и так далее. 「例えば、私達は新聞「夕刊ビシケク」や「デ・ファクト」等の最新号がいつ出版されるのを待っていた。」(RR11:6)
問題提起	文章における問題意識を示すこと	Ошол интернеттен маалыматка канчалык деңгээлде ишенсе болот. 「インターネットにある情報をどのくらい信用すればよいのだろうか。」(KRK04:14)
予告	話題内容や方向付けを示すこと	Гезит журналдар келечекте керек болобу деген суроо талкууга алсак. 「新聞・雑誌が将来的に必要なかという問題について見てみよう。」(KK14:6)
仮定	事実に基づかない予想や想定のこと	Эгерде интернеттен карабастан китептерди кызып окуса, изденип окуса пайдасы абдан көп таасир этмек. 「もし、インターネットの代わりに本を使って自力で宿題をしようとすればより役立ったかもしれない。」(KRK15:10)

(表中の「事例」で取り上げている例文の()内のアルファベットと数字は、書き手の所属群、回答者番号、文番号を指す。)

4. 結果と考察

調査の結果、4群における文章構成要素の出現数は表3の通りであった。

表3 4群 (KK, RR, KRK, KRR) の構成要素総数³⁾

		KK	RR	KRK	KRR
平均段落数		3.0	3.5	3.4	3.4
構成要素	意見の陳述	83 (26.9%)	143 (31.3%)	218 (35.0%)	206 (41.0%)
	論拠	39 (12.6%)	80 (17.5%)	79 (12.7%)	54 (10.7%)
	事実の報告	96 (31.1%)	125 (27.4%)	226 (36.3%)	177 (35.2%)
	説明	75 (24.2%)	72 (15.8%)	65 (10.5%)	31 (6.2%)
	問題提起	6 (1.9%)	11 (2.4%)	9 (1.4%)	26 (5.2%)
	予告	9 (2.9%)	16 (3.5%)	19 (3.1%)	8 (1.6%)
	仮定	1 (0.3%)	10 (2.2%)	6 (1.0%)	1 (0.2%)
	文の総数	309 (100%)	457 (100%)	622 (100%)	503 (100%)
1文章あたりの平均文数		17.1	15.7	16.7	17.9

表3の構成要素数の偏りは、フィッシャーの直接確率検定の結果、4群全体において有意であった ($p<.05$)。さらに、有意であった4群に対し、ボンフェローニ法による対比較を実施した結果、KKとKRK間、KKとKRR間、RRとKRK間、RRとKRR間、KRKとKRR間において構成要素の分布に差があった ($P<.05$)。4群で最も多く出現した構成要素は、KKは「事実の報告」、RRは「意見の陳述」、KRKは「事実の報告」、KRRでは「意見の陳述」であった。

意見文においては、事実と意見の書き分けが要点であることから(己野, 1988)、事実と意見から成る構成要素が導入、本論、結びのどの段落に出現したのかを導き出すため、4群で出現した形式段落が3段落以上の意見文を、「事実の報告」と「説明」から成る「事実・出来事の描写」と、「意見の陳述」と「論拠」から成る「書き手の意見陳述」の出現位置を探った。その結果を表4として示しておく。「事実・出来事の描写」は、客観的な観点から事実や出来事を述べ、説明を行う「事実の報告」単独、もしくは「事実の報告」と「説明」の組み合わせから成り、「書き手の意見陳述」は書き手の主張や主張を支える理由を主観的に述べている「意見の陳述」単独、もしくは「意見の陳述」と「論拠」の組み合わせから成る単位である。「説明」と「論拠」はそれぞれ「事実の報告」と「意見の陳述」について理由や解説を加える要素であることから、書き手の客観的な観点と主観的な観点を強固にする要素であると判断し、組み合わせた文章についてはそれらの要素をもって1つの文章構成要素の単位として扱い、分析の対象になりうると判断し分析を進めた。

³⁾ 構成比は小数点以下第2位を四捨五入している。そのため、各構成要素を合計しても必ずしも100とはならない。

表4 各段落における「事実と出来事の描写」と「書き手の意見陳述」の出現比率

段落	文章構成要素	KK	RR	KRK	KRR
導入	事実・出来事の描写	68 (85.0%)	56 (62.2%)	83 (58.5%)	63 (60.0%)
	書き手の意見陳述	12 (15.0%)	34 (37.8%)	59 (41.5%)	42 (40.0%)
本論	事実・出来事の描写	64 (59.8%)	91 (49.5%)	115 (51.6%)	60 (39.7%)
	書き手の意見陳述	43 (40.2%)	93 (50.5%)	108 (48.4%)	91 (60.3%)
結び	事実・出来事の描写	15 (30.6%)	22 (23.4%)	27 (24.8%)	11 (20.4%)
	書き手の意見陳述	34 (69.4%)	72 (76.6%)	82 (75.2%)	43 (79.6%)
本文の文の総数		236 (100%)	368 (100%)	474 (100%)	310 (100%)

表4の出現比率について、フィッシャーの直接確率検定を行ったところ、4群全体において有意であった ($p < .001$)。さらに、ボンフェローニ法による対比較を実施した結果、KKとRR間、KKとKRK間、KKとKRR間において構成要素の分布に差があった ($P < .05$)。表4から、KK、RR、KRK、KRRの4群いずれも、「導入」においては、「事実・出来事の描写」の出現率が高い一方で、結びには「書き手の意見陳述」の出現率が高くなっていることが窺える。このことから、4群すべてが「導入」においては客観的文章構成を好み、「結び」になると主観的文章構成が好まれていることが窺え、文章の後半に向けて徐々に書き手の主観が強くなっていくスタイルであることが考えられる。

さらに、文章は、文章の最初に書かれている冒頭、あるいは書き出しの展開において成立し、始発の表現が事実の叙述、もしくは書き手の見解を最初に述べるかという選択が必要とされている(市川, 1971; 若尾, 1988)。岡本(2005)は説得において、言語スタイルに基づくメッセージの印象が、読み手の意見の受け入れ態度や、情報源の印象、メッセージを理解しようとする意欲にかかわり、説得に影響する可能性があるとして指摘している。冒頭文は、書き手と読み手が最初に接触する文であり、説得を目的とする文章を書く作業において、書き手がこれから述べようとする内容について、どのように書きだすかは、文章構造に関わる重要な分析項目になりうると思われる。本研究では、冒頭文を4群の「導入」における1文目として捉え、樺島(1983)のツリーの構成要素を援用しながら、書き手の意見の述べ方を質的に分析する。

4.1節から4.4節では、4群の個別の結果について報告する。なお、図中の○は形式段落、()内の数字は文番号を表している。

4.1. キルギス語モノリンガル (KK)

KKの個々の意見文に着目すると、KKが用いた要素で1つの文章で最も多く出現したものは「意見の陳述」6編、「事実の報告」6編であり、続いて「説明」5編、「意見の陳述・論拠・事実の報告」1編であった。

図2は、KKで出現したキルギス語意見文の構造の例である。

図2を見ると、このKKは導入として「事実の報告」を提示し、本論の段落のまとめりとして、「事実の報告」と「意見の陳述」を組み合わせて書き手の意見を述べていることが窺える。また、その「事実の報告」にはその事実に関する「説明」を加え、文章を構成している。

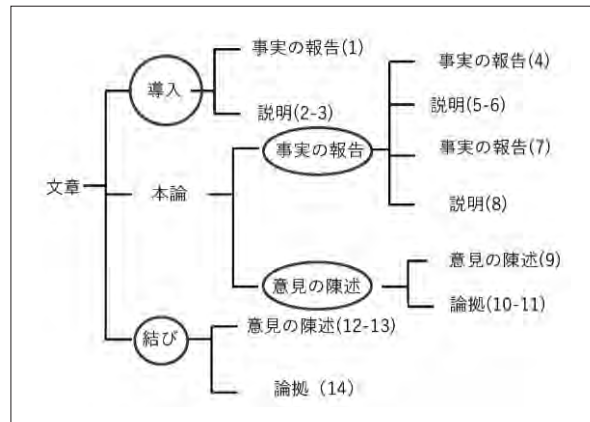


図2 KKの「説明」文章構造の例【KK02】

また、文章の「導入」の1文目に着目すると、KKの文章構成要素は表5の通りであった。

表5 KKにおける冒頭文の構成要素

構成要素	事実の報告	意見の陳述	予告	問題提起
出現数	15 (83.3%)	1 (5.6%)	2 (11.1%)	0 (0%)

表5から、KKの意見文は書き手が「事実の報告」から書き出している意見文が多いことが窺える。それぞれの意見文での「事実の報告」の内容を見ていくと、キルギス語の人称代名詞一人称複数 биз (biz)「私達」を用いて、書き手と読み手の社会常識を共有していることが窺える。

Азыркы биз жашап жаткан 21 кылым технологиянын, интернеттин өнүккөн доору десек болот.

「現在、私達が生きている21世紀はテクノロジーやインターネットが発達した時代である。」(KK02:1)

Азыркы учурда маалымат алуу биз үчүн өтө жеңил.

「現在、私達にとって情報を得ることは非常に容易である。」(KK17:1)

また、一方で、同じ「事実の報告」ではあるが、キルギス語の人称代名詞一人称複数 биз (biz)「私達」を用いず、事実のみを提示している冒頭文も出現している。

XXI-кылым илим техниканын кылымы. 「21世紀は科学と技術の世紀である。」(KK09:1)

Азыркы заманда техника эң мыкты өнүгүп жана да көптөгөн бийиктиктерге кол жеткизип жагат.

「現代は技術が発達し、多くのことができるようになった。」(KK18:1)

これらの文は、書き手の社会的な常識を読み手に示している一方で、事実のみを提示しているため、書き手の常識と読み手の常識を一致させ、読み手と事実や出来事を共有しようとしている姿勢が見られない。

「予告」については、次の KK10, KK16 のような例が確認された。

Албетте!「当然である」(KK10:1)

Чындыгында бул темалар адам баласын түйшөлтпөй койбойт.

「このテーマは人間について実に考えさせてくれる。」(KK16:1)

「予告」は、話題内容や方向付けを示すことであるが、上述の文では、課題に対して書き手の立場のほのめかし (KK10) や、書き手が課題に対する感想が述べられている (KK16)。これらの冒頭文は、書き手の立場を明確にはしておらず、この後、書き手の意見を述べる文や、出来事や事実を描写する文を配置している。

4.2. ロシア語モノリンガル (RR)

RR の個々の意見文において、1つの文章に最も多く用いられた文章構成要素は「意見の陳述」13編、「事実の報告」7編、「論拠」2編、「意見の陳述・論拠」2編、「説明」1編、「意見の陳述・事実の報告」1編、「事実の報告・説明」1編、「意見の陳述・論拠・事実の報告」1編、「意見の陳述・事実の報告・説明」1編であった。

RR のツリーの階層構造からみた意見文の例として次の図3を挙げておく。

図3のRRを見れば、導入では「意見の陳述」を提示し、本論で3つの段落からなる「意見の陳述」を述べ、本論の最後で意見の陳述の説明となる「論拠」を提示している。

RR の意見文の「導入」の冒頭文の文章構成要素は、表6の通りであった。

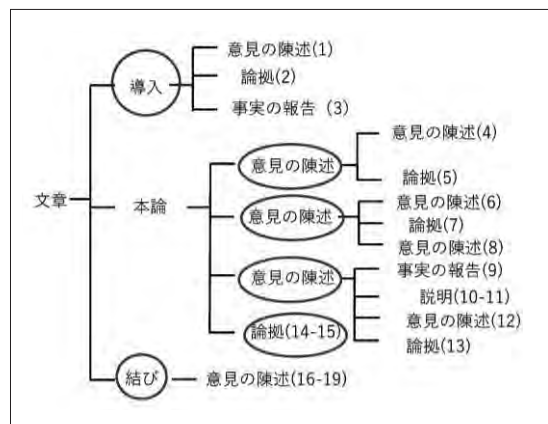


図3 RRの「意見の陳述」文章構造の例【RR01】

表 6 RR における冒頭文の構成要素

構成要素	事実の報告	意見の陳述	予告	問題提起
出現数	16 (55.2%)	12 (41.4%)	1 (3.4%)	0 (0%)

「事実の報告」については KK のように、人称代名詞一人称複数 мы (my) 「私達」の使用や、所有代名詞 наш (nash) 「私達の」が確認されるとともに、一人称複数代名詞を用いず、書き手の常識を示すような文が冒頭で確認された。また、RR の冒頭文では KK では確認されなかった次のような事例が確認された。

Второе десятилетие многие эксперты твердят о смерти печатных СМИ: мол реклама в интернете забирает основные доходы газет и журналов.

「多くの専門家はもう20年も前から「印刷媒体は消滅する。インターネットでの広告が新聞と雑誌の主な収入を奪い取っている」と何度も繰り返している。」(RR22:1)

RR21の事例から「事実の報告」として、書き手の社会常識ではなく、専門家の主張を引用することで、文章の冒頭での書き手の意見文の客観性を持たせようとしていることが窺える。

「意見の陳述」については次のような事例が確認された。

По-моему мнению в интернете не вся информация достоверна и точна.

「私の意見ではインターネット上における全ての情報は確認された、確かな情報とは言えない。」(RR04:1)

Я думаю что в будущем нам не нужны будут газеты или журналы, потому что у каждого будет доступ к интернету.

「私は、将来皆がインターネットにアクセスできるようになり、我々に新聞と雑誌が要らなくなると思う。」(RR24:1)

RR の意見文の冒頭文では、RR04、RR24のように、по-моему мнению (po moemu mneniyu) 「私の意見では～。」や я думаю (ya dumayu) 「私は～と思う。」といった言語形式を用い、書き手の意見を前面に出す「意見の陳述」が見られた。また、RR12のように、人称代名詞一人称複数 мы (my) 「私達」を用いている事例も確認された。

В век информационных технологий мы должны понимать и осознавать что газеты и журналы теряют свою необходимость.

「情報技術の時代において、新聞と雑誌の必要性が無くなっていくことを私達が理解し、意識しなければならない。」(RR12:1)

RR12の事例から、人称代名詞一人称複数 **мы** (my) を用いることで、書き手だけではなく読み手も同じ立場に立たせ、書き手の意見を主張している冒頭文も確認された。

4.3. キルギス語・ロシア語バイリンガル（キルギス語優位）(KRK)

KRK の個々の意見文において、KRK が1つの文章の中で最も用いた要素は「事実の報告」18編、「意見の陳述」13編、「意見の陳述・事実の報告」5編、「論拠」1編であった。

KRK のツリーの文章階層構造からみた事例として次の図4を挙げる。

図4から、導入としては「予告」をし、「事実の報告」と「説明」を組み合わせていることが窺える。本論としては「事実の報告」と、「仮定」を加えた「意見の陳述」から構成し、結びに書き手自身の意見を述べるとともに、その根拠となる「論拠」をもって構成している。

KRK における冒頭文の文章構成要素については、次の表7の通りであった。

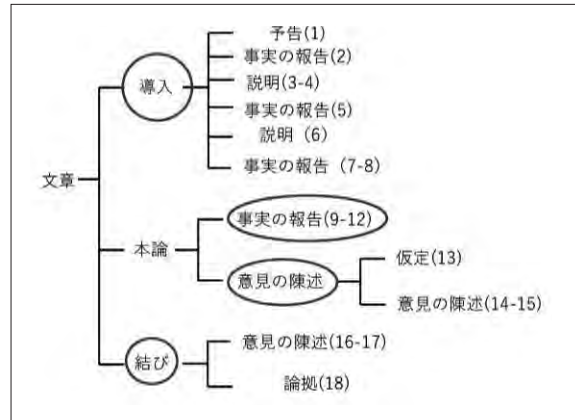


図4 KRK「事実の報告」文章構造の例【KRK02】

表7 KRK における冒頭文の構成要素

構成要素	事実の報告	意見の陳述	予告	問題提起
出現数	26 (70.3%)	6 (16.2%)	4 (10.8%)	1 (2.7%)

KRK の意見文の冒頭では「事実の報告」が多く、「意見の陳述」、「予告」の順に出現していることが明らかになった。

Азыркы учурда көбүнчө жаштар интернетти пайдаланышат.

「現在、大多数の若者がインターネットを使用している。」(KRK04:1)

Биз баарыбыз билгендей эле азыркы заманда баардык адамдар – жаштарбы каарыларбы маалымат кызматтарын колдонушат.

「私達は皆が知っているように現代人は老若男女問わず、マスメディアを利用している。」(KRK36:01)

KK と同様に、人称代名詞一人称複数 **биз** (biz) 「私達」を用いて、書き手と読み手の社

会常識を共有しようとしていることが窺え、人称代名詞を用いず、書き手の知りうる事実を提示している文が冒頭に見られた。

KRKの「意見の陳述」については、次のような事例が確認された。

Менин оюм, интернет чыгып элдин жашоосуна терс таасирин тийгизип жатат дегенден алысмын.

「私の意見では、インターネットが人々の生活に悪い影響を与えていることは決してない。」(KRK12:1)

Азыркы заманды интернетсиз элестетүүгө мүмкүн эмес деп ойлойм.

「インターネットの無い現在の世界を想像することは不可能だと考える。」(KRK19:1)

言語形式としては, менин оюм (menin oyum) 「私の意見では～」や ойло (oilo) 「考える」といった表現が用いられ、冒頭において明確に書き手の立場を示す「意見の陳述」が行われている。また、同じキルギス語意見文である KK の意見文では見られなかった事例も KRK 意見文では見られ、それは「予告」として, саламатсыздарбы. (salamatsızdarbı) 「こんにちは。」が用いられ、不特定多数の読み手への敬意を示している。出現した4例とも、「саламатсыздарбы. (salamatsızdarbı) →意見の陳述」という構成だったことから、書き手の意見表明を和らげていることが窺える。

4.4. キルギス語・ロシア語バイリンガル(ロシア語優位)(KRR)

KRR の意見文は、KRR が用いた要素で「意見の陳述」15編と最多であり、続いて「事実の報告」12編、「意見の陳述・事実の報告」1編であった

KRR のツリーの文章階層構造の意見文の例として図5を示しておく。

図5のKRRは、導入は「事実の報告」から「問題提起」をし、「意見の陳述」を行っている。本論としては、3つの段落からなる「意見の陳述」をし、「意見の陳述」は「論拠」や「問題提起」「事実の報告」を交えながら構成している。結びは書き手自身の主張である「意見の陳述」を置き、文章をまとめている。

KRR の冒頭文での文章構成要素については、次の表8の通りであった。

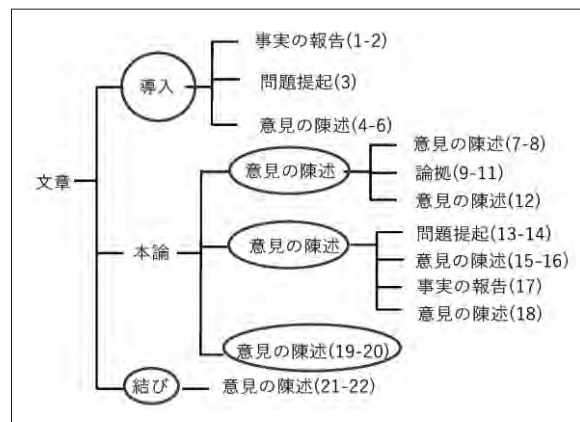


図5 KRRの「意見の陳述」文章構造の例【KRR24】

表 8 KRR における冒頭文の構成要素

構成要素	事実の報告	意見の陳述	予告	問題提起
出現数	14 (50%)	14 (50%)	0 (0%)	0 (0%)

KRR の導入における一文目では、「意見の陳述」と「事実の報告」が同数で出現した。

まず「事実の報告」については、RR と同様に、人称代名詞一人称複数 мы (my) 「私達」の使用や、所有代名詞 наш (nash) 「私達の」が確認されるとともに、一人称複数代名詞を用いず、書き手の常識を示すような文が冒頭で確認された。

На сегодняшний день интернет есть в каждом доме.

「今日、すべての家庭にインターネットがある。」(KRR15:1)

В наше время интернет имеет огромное влияние на человека.

「私達の時代において、インターネットは人々に大きな影響を与えている。」(KRR28:1)

また、「意見の陳述」についても、RR と同様に、по моему мнению (po moemu mneniyu) 「私の意見では～。」や я думаю (ya dumayu) 「私は～と思う。」といった言語形式を用い、書き手の意見を前面に出している。

По моему мнению несмотря на то что есть доступ к интернету по любому надо читать газеты и журналы.

「私の意見では、インターネットへのアクセスのある無しに関わらず、新聞や雑誌も読まなければならない。」(KRR09:1)

Я думаю что и интернет и газеты важны в наше время.

「私達の時代において、インターネットも新聞も重要だと私は思う。」(KRR25:1)

しかしながら、RR の冒頭文で見られた権威ある人物の発言等の引用は出現しなかった。ただし、本研究は小規模な文章構造の比較研究に留まっているため、今後データをより多く収集し、本研究での知見がどこまで一般化できるかを検証する必要がある。

4.5. 考察

本研究では、樺島 (1983) の文章構成要素に基づく分析を行った結果、全体の傾向としては、4 群すべてが「導入」においては客観的文章構成を好み、「結び」になると主観的文章構成が好まれていることが窺え、文章の後半に向けて徐々に書き手の主観が強くなっていくスタイルであることが考えられる。

それぞれの群に着目すると、キルギス語意見文である **KK** と **KRK** は「事実の報告」、ロシア語意見文では、**RR** と **KRR** は「意見の陳述」を好んで用いている。バイリンガルに関しては、**KRK** は優位とするキルギス語、**KRR** は優位とするロシア語での叙述スタイルを用いて文章を書いたことが考えられる。

文章構造には学校教育との関連が指摘されているため（西條, 2019b）、第一言語としての「キルギス語」「ロシア語」教育の教科書を分析し、本研究での結果との比較を試みた。教科書の選定は、「2020-21年度教育科学省推薦教科書一覧」に掲載され、キルギス国内で出版された教科書のうち、説得を目的とする文章の学習単元がある「キルギス語」8年生（Imanov et al., 2016）、「ロシア語」6年生の教科書とした（Breusenko et al., 2019）。

キルギス語教科書については、意見や考えを述べる文章の構造として帰納法と演繹法の2種類があり、さらに演繹法には「テーゼ」「論拠（論証と事実）」「結論」の3段論法がある（Imanov et al., 2016）。本研究での **KK** と **KRK** の意見文は徐々に書き手の意見が出現し、徐々に結論に導いている傾向があったため、帰納法を用いて事実や出来事を提示しながら、書き手の結論に導く意見文であったと考えられる。

一方、ロシア語教科書については、6年生の教科書（Breusenko et al., 2019）では、ロシア語における意見や考えを述べる文章の構造として「テーゼ」「根拠」「結論」の3段論法を挙げ、根拠の組立てには書き手自身の言葉もしくは、著名な人物や明確な情報源からの引用が重要であるとされる（Breusenko et al., 2019）。本研究においては意見文の導入で意見を述べる文章が少なく、教科書で示されている文章構造とは異なる結果であった。しかしながら、**RR**、**KRR** の冒頭文では「意見の陳述」が出現しており、文章の最初に書き手の意見表明をしている意見文も見られ、演繹的に意見文をまとめようとしていることも窺える。

意見の述べ方には、ポライトネスが関連し、説得効果に影響を与える可能性があり（岡本, 2005）、書き手が同じ趣旨の主張をしても、用いる言語形式によっては、説得効果を高めることや、読み手へのフェイス侵害行為に捉えられ逆に阻害する要因になりうる。そこで、文章の冒頭文について本研究で得られた知見を Brown and Levinson（1987）のポライトネス理論の観点から考察をしていくこととする。

4群に共通して「事実の報告」で見られた人称代名詞や所有代名詞の使用については、書き手と読み手を同じ視点に置き、読み手と書き手が共通認識を有していることをアピールし、読み手のポジティブ・フェイスに配慮していることが窺える。一方で、人称代名詞一人称複数を用いない場合は、書き手の社会常識を一方向的に提示し、読み手と異なる立場の事実や出来事を提示する可能性もあり、読み手へのネガティブ・フェイスを侵害するフェイス侵害行為になりうると考えられる。「意見の陳述」においては、ロシア語意見文で **RR** や **KRR** で明確に書き手の意見を示す事例が確認され、書き手が読み手のフェイスに関係なく、書き手としての立場を明確に示している。書き手の意見を冒頭に述べておくことで、文章全体の書き

手の立場を示し、文章の目的を読み手に教えているとも考えられる。しかしながら、書き手と読み手の意見や立場が異なれば、読み手へのフェイス侵害行為になり、文章全体に対する印象にもつながり、冒頭文の後で、書き手が読み手に対してどのようなアプローチをとり、読み手の納得を得ながら説得をしていくのが重要になってくるであろう。KRKにおいては冒頭文で挨拶表現を用い、読み手に対する敬意を示し、書き手の意見を和らげていることも考えられる。柳澤（2004）は、弁論において、最も話者が警戒すべき要素は聴衆が話者に対して持っている先入観であり、弁論への抵抗として強く作用し、書き言葉の場合においても同様であると述べている。このことから、KRKの意見文においては、書き手が読み手の書き手に対する何らかの先入観を和らげる方法として読み手への挨拶を用いていることも考えられる。先入観は、書き手が属している集団、書き手の立場や身分等から簡単に作られることから（柳澤，2004）、説得を目的とした文章において、書き手の言語の論理や、言語教育だけではなく、書き手の所属する社会も関わり、文章構造に影響を及ぼしていることが考えられる。

本研究の結果を同一社会文化における言語と社会の関連から考えていく。キルギスにおける言語使用を見れば、出身教授学校によって接触言語が異なることから、キルギス語話者はキルギス語とロシア語の二言語、ロシア語話者はほぼロシア語のみに接触しており（西條，2019a）、社会的な実用性からキルギス語が劣位、ロシア語が優位であり、二者間で日常的に接する言語や集団に差異がある。他の旧ソ連諸国と同様に、基幹民族言語（キルギス語）とロシア語に対する価値観が異なることから（小田桐，2015；堀口，2018）、日常的に接する言語や集団の差異が書く行為に影響を及ぼしているとも考えられる。本研究では、読み手を「書き手と同じ世代のキルギスの大学生」と設定したが、書き手が想定する読み手が異なり、キルギス語話者KKとKRKはキルギス語話者とロシア語話者の二者、ロシア語話者RRとKRRはロシア語話者の読み手を想定し、文章を書き進めた可能性がある。そのように仮定すれば、KKとKRKは、共通認識が異なるキルギス語とロシア語話者の両方の立場から説得するストラテジーを用いなければならない。共通認識は各文化に特有なものであり、普遍的真理であることが多い（リース，2014）。同一社会文化においても共通認識が異なるため、意見の述べ方の選択が難しく、読み手に配慮せざるを得ないストラテジーを選択していることも考えられる。

5. 本研究のまとめと今後の課題

5.1. 本研究のまとめ

本研究では、「文章構造」の観点からKK，RR，KRK，KRRの4群の意見文における説得の方略を究明した。3.1節で述べた研究課題に従い、本研究で得られた知見についてまとめる。

研究課題 1：同一社会文化を背景とした異なる言語話者は意見文においてどのような文章構造を用いようとするか

本研究では4群全体の傾向としては、「導入」においては客観的文章構成を好み、「結び」になると主観的文章構成が好まれていることが窺え、文章の後半に向けて書き手の主観が強くなる帰納法であることが考えられる。KK, KRK については帰納法が好まれ、書き手の意見を徐々に結論に向けて出していく方略が好まれていることから「事実の報告」が多く、RR, KRR ではキルギス語同様に帰納的ではあるものの、「意見の陳述」で明確に意見を示しながら結論に持っていく方略であった。

研究課題 2：同一社会文化を背景とするバイリンガルの意見文の文章構造はモノリンガル話者と比較をすることでどのような特徴が見られるのか

キルギス語意見文(KK, KRK)については、第一言語であるキルギス語の影響が強いことが考えられるが、KRK には「意見の陳述」も多く出現したことから、ロシア語での文章の書き方を用いたことも考えられる。また、KRK では冒頭文での読み手への挨拶によって、書き手の意見表明を和らげる意図が窺え、キルギス語意見文においてはモノリンガルと異なる可能性が明らかになった。

ロシア語意見文(RR, KRR)については、共通して「意見の陳述」が多く出現し、本研究においてはロシア語意見文に構成要素には顕著な差異は見られなかった。しかしながら、冒頭文において、RR においては、専門家等の権威ある人物の発言を引用する「事実の報告」が確認された。

研究課題 3：意見文の文章構造において、キルギス語・ロシア語バイリンガルのそれぞれの言語的な優位性はどのように表出するのか

KK と RR, KRK, KRR の間で段落における「事実・出来事の描写」と「書き手の意見陳述」の出現比率に偏りが見られた。個別の要素に着目すると、バイリンガル(KRK, KRR)の意見文では、RR に見られた「意見の陳述」を多く用いる傾向があったことから、本研究ではロシア語の優位性が高く出現したことが窺える。

本研究の結果から、キルギス語、ロシア語の文章構造のいずれも第一言語教育の影響が示唆され、言語文化に関する共通認識が異なる可能性がある。同一社会文化におけるバイリンガルについては、社会的に実用性が高い言語がバイリンガルの言語能力に影響し、その優位性が高いということが窺えた。

5.2. 日本語教育への示唆

本研究で得られた知見は日本語に限らず、外国語教育において、教師は学習者の第一言語や、これまでの教育の背景にも注目する必要があることを示唆している。大学の留学生教育のように日本国内の日本語教育においては、様々な言語文化的背景を持った学習者が1つのクラスにいる場合には、学習者によって文章の説得性の観点が異なっている可能性がある。

また、海外日本語教育では、キルギスのように、1つの国・地域の社会の中で言語接触の状況であり、異なる言語を話す集団の間で相互伝達のために用いられる言語である「リンガフランカ」(柳沢・石井, 1998)が複数存在する国や地域があることも考えられる。リンガフランカ等の言語状況と社会、教育の関わりから、同一社会文化内で学習者の第一言語によって文章構造が異なることや、1つの教室内に複数の言語文化的背景を持つ学習者が混在する可能性も考えられる。そのため、教師が学習者の第一言語の文章構造の特徴を把握することや、学習者の第一言語の作文教育がどのように行われているかを理解しておくことは有益である。

日本国内、海外の日本語教育に共通して、書き手が第一言語においてどのような説得の方略を好むかを教師が紹介することは、書き手と読み手の相互理解を促すとともに、説得を目的とする文章におけるコミュニケーション力の向上につながることを期待される。説得性の優劣ではなく、個々の特徴を客観的に示すことが重要である。

5.3. 今後の課題

本研究では、同一社会文化の1つの事例としてキルギスを取り上げ、KK, RR, KRK, KRRの4群間の文章構造の特徴について、樺島(1983)の「ツリーの構成要素」の観点から明らかにしてきたが、さらにデータを追加し、本研究の結果を検証する必要がある。

また、本研究は意見文において書き手がどのように事実と意見を配置しているのか、それらの構造の特徴を明らかにした。しかしながら、書き手が、事実と意見を配置する以前に、与えられた課題に対し、どのような発想を用いて読み手の説得を試みているかについても検討する必要がある。書き手の発想に関する研究には、アリストテレスが規定したエートス(性格)、ロゴス(論理)、パトス(感情)の3つの概念に基づく「説得のアピール(Connor & Lauer, 1985)」を用いたもの(kamimura and Oi, 1998; 近藤, 2013等)や、ロゴスによる説得に着目した「議論の型(トポス)(Weaver, 1953; 1970)」の観点に基づくもの(柳澤, 1993; 2006; 香西, 1998等)がある。本研究で得られた結果についても、これらの観点から、更なる分析を行い、文章における説得のストラテジーを発想と配置の両面から明らかにする必要があるだろう。

バイリンガルの読み書きの技能の発達については、第一言語で読み書き能力を習得していれば、転移によって第二言語で同じ能力を習得することが容易になり、両言語の構造が似て

いるほど転移の程度が大きくなる（ベーカー，1996）。キルギス語とロシア語は，キルギス語は「チュルク諸語」，ロシア語は「印欧語族—スラブ語派」であり，言語体系が大きく異なるため，転移は少ないことも考えられるが，第一言語，第二言語での説得を目的とした文章に関する教育の実際を詳細に分析する必要がある。いずれも今後の課題としたい。

引用・参考文献

- 伊集院郁子，高橋圭子（2012）「日本・韓国・台湾の大学生による日本語意見文の構造的特徴—「主張」に注目して—」『日本語・日本学研究』2，pp.1-16.
- 伊集院郁子，盧 姪鉉（2015）「日韓の意見文に見られるタイトルと文章構造の特徴：日本語母語話者と韓国語母語話者と韓国人日本語学習者の比較」『社会言語科学』18(1)，pp.147-161.
- 市川孝（1971）「書き出しや結びの書き方」『作文指導事典』（井上敏夫，倉沢栄吉，滑川道夫，藤原宏編），pp.335-339，第一法規.
- 岡本真一郎（2005）「言語スタイルと説得—今後の研究の展開に向けて—」『心理学評論』48(1)，pp.85-95.
- 小田桐奈美（2015）『ポスト・ソヴィエト時代の「国家語」—国家建設期のキルギス共和国における言語と社会』，関西大学出版部.
- 金子弥寿彦（1996）「第2章 作文の基礎技術3 構成の技術」『作文技術指導大事典』（国語教育研究所編），pp.79-82，明治図書.
- 樺島忠夫（1983）「4. 文章構造」『朝倉日本語新講座5 運用I』（水谷静夫編），pp.118-157，朝倉書店.
- 金有暉（2006）「韓国人日本語学習者を対象とした日本語の文構成能力に関する研究」『日本語教育論集』22，pp.3-17.
- 香西秀信（1998）「心の弱さと議論法：ドストエフスキー『罪と罰』」『オピニオン叢書44 修辭的思考—論理でとらえきれぬもの—』，pp.103-133，明治図書.
- 小松久男，梅村坦，宇山智彦，帯谷知可，堀川徹（2005）『中央ユーラシアを知る事典』，平凡社.
- 近藤章（1996）「第3章 ジャナル別表現の技術5「意見文」の作文技術」『作文技術指導大事典』（国語教育研究所編），pp.225-241，明治図書.
- 近藤行人（2013）「説得のアピールを用いた日本語学習者の論証文の分析—日本人大学生，ウズベキスタン人大学生との比較」『第二言語としての日本語研究』16，pp.160-177.
- 西條結人（2019a）「多民族・多言語社会における言語選択と使用に関する社会言語学的研究：キルギスの大学生を対象とした調査の結果から」『語文と教育』33，pp.1-13.
- 西條結人（2019b）「説得を目的とした文章に関する対照修辭学的研究の概観及び展望」『教育学研究ジャーナル』24，pp.13-22.
- 迫田久美子（2020）『改訂版 日本語教育に生かす第二言語習得研究』，アルク.
- 佐々木泰子（2001）「課題に基づく意見の述べ方—日本人の場合・留学生の場合—」『日本語教育のためのアジア諸言語の対訳作文データの収集とコーパスの構築 平成11・12年度科学研究費補助金研究基盤研究（B）研究成果報告書』，pp.219-230.
- 杉田くに子（1994）「日本語母語話者と日本語学習者の文章構造の特徴—文配列課題に現れた話題の展開—」『日本語教育』84，pp.14-26.
- 田浦秀幸（2014）「第5章 読み・書き・語る能力の発達」『バイリンガリズム入門』（山本雅代編），pp.3-19，大修館書店.
- 長谷川哲子，堤良一（2012）「意見文の分かりやすさを決めるのは何か？—大学教員による作文評価を通じて—」『関西学院大学日本語教育センター紀要』1，pp.7-18.
- 深田博己（2002）『説得心理学ハンドブッカー—説得コミュニケーション研究の最前線—』，北大路書房.

- ベーカー・コリン (1996) 『バイリンガル教育と第二言語習得』, 大修館書店.
- 堀口大樹 (2018) 「インタビュー調査に基づいたバルト3国のロシア語系住民の言語状況の考察」『スラヴ文化研究』16, pp.1-21.
- 前川孝子 (2020) 「日本の小論文と中国の議論文における論拠の特徴」『表現研究』111, pp.31-40.
- 己野欣一 (1988) 「意見文 (作文)」『国語教育研究大辞典』(国語教育研究所編), pp.43-44, 明治図書.
- 柳沢好昭, 石井恵理子 (1998) 『日本語教育重要用語』, バベルプレス.
- 柳澤浩哉 (1993) 「トポスによる説得的言論分析の試み—近松におけるロゴスの意味—」『日本研究』8, pp.21-39.
- 柳澤浩哉 (2004) 「冒頭のレトリック」『広島大学日本語教育研究』14, pp.89-93.
- 柳澤浩哉 (2006) 「レトリックと説得行動」『講座・日本語教育学第2巻 言語行動と社会・文化』(縫部義憲 監修, 町博光編), pp.146-159, スリーエーネットワーク.
- 山本雅代 (2014) 「第1章 バイリンガリズム・バイリンガルとは」『バイリンガリズム入門』(山本雅代編), pp.3-19, 大修館書店.
- リース・サム (2014) 『レトリックの話 話のレトリッカー—アリストテレス修辞学から大統領スピーチまで』, 論創社.
- 若尾忠 (1988) 「構成」『国語教育研究大辞典』(国語教育研究所編), pp.290-292, 明治図書.
- Breusenko L., Matokhima T.(2019)Ruskii yazyk: Uchebnik dlya 6 klassa shkol s russkim yazykom obucheniya, ARCUS Publishing, Bishkek.
- Brown, P. and Levinson, S. (1987) Politeness: some universals in language usage, Cambridge University Press.
- Connor, U. and Lauer, J. (1985) Understanding Persuasive Essay Writing: Linguistic/Rhetorical Approach. Text 5(4), pp.309-326.
- Hinds, John (1983) Contrastive rhetoric: Japanese and English. Text3, pp.183-195.
- Imanov A., Kaybildaev A., Saparbaev A., Usubaliyev B.(2016)Kırgız tili: Sintaksis, II -bölük.Orto mektep. 8-klassı üchün okuu kitebi, Bilim komp'yuter, Bishkek.
- Kamimura, T. and Oi, K. (1998) Argumentative Strategies in American and Japanese English. World English, 17(3), pp.307-323.
- Kaplan, Robert B. (1966) Cultural Thought Patterns in Intercultural Education, Language Learning, 16, pp.1-20.
- Korth Britta (2005) Language Attitudes towards Kyrgyz and Russian: Discourse, Education and Policy in post-Soviet Kyrgyzstan, PETER LANG, Bern.
- Natsional'nyi statisticheskii komitet Kyrgyzskoi Respubliki (2018) Statisticheskii sbornik«Obrazovanie i nauka v Kyrgyzskoi Respublike», <http://www.stat.kg/media/publicationarchive/96f08785-4102-4037-9650-bfe7315eaa68.pdf> (2021年3月10日閲覧).
- Orusbaev Abdykadyr, Arto Mustajoki, Ekaterina Protassova (2008) Multilingualism, Russian Language and Education in Kyrgyzstan, International Journal of Bilingual Education and Bilingualism,11 (3-4), pp.476-500.
- Skutnabb-Kangas, Tove. (1984) Bilingualism or Not – The Education of Minorities. Multilingual Matters LTD, Clevedon.
- Weaver, Richard M. (1953) The Ethics of Rhetoric, HENRY REGNERY COMPANY, Chicago.
- Weaver, Richard M. (1970) Language is Sermonic, Language is Sermonic: Richard M. Weaver on the Nature of Rhetoric (Edited by Johannesen, Richard S., Strickland Rennard and Eubanks, Ralph T.), pp.201-225, Louisiana State University Press, Baton Rouge and London.